

世に言うゴールデンウィーク、東京駅は混雑していた。と言っても、東京駅の場合、普通の日でも十分混雑しているが、自分は広島までの新幹線の切符を買う為に、自動券売機に向かった。不安だった。本来、世間様が休暇を有意義に過ごすことやらで血眼になつて出かけた日には、家でのんびり読書や執筆に勤しむ事に決めている自分なので、人が報道までされてしまうゴールデンウィークに、よりにもよつて新幹線で広島まで旅行する事は稀な展開だ。新幹線が座れるのか不安でならない。約四時間にわたつて立ちっ放しになつては、広島に着いてから何をする気も起きないだろう。それでありながら、敢えて広島くんたりまで行こうと決めたのは、別に観光目的でもなければ憲法記念日に平和主義について考えてみようと思つた訳でもなく、単に広島に住んでいる友人を訪ねる事が目的だった。その友人は勤務が不定期で、平凡なサラリーマンの自分とは休みが合わず、これまで何度か日程調整を試みて失敗し続けて、無理しても会いに行かないと、このままずっと会わない事になりそうだった。

そうは言つても、ジヨディ・フォスターに会いに行くならともかく、決して美青年とは言い難い一友人に会う為に、約四時間も立ちっ放しで新幹線旅行は真つ平御免だ。世の中、流石にそこまで薄情ではなく、有難くもさほど待たない時間の新幹線で指定席

が取れた。良かった。数日前に広島行きを決めたというのに、ホテルも二泊とも取れたし、案外、上手くいくものだ。多分、一人旅だからだろう。そう思うと、喜びも半減する。

とにかく、ほつと一安心すると、今日の競馬の馬券をまだ買つてない事が次に気になる。広島に着いてから買うのでは、時間的に難しいかもしれない。そこで自分が乗る新幹線のホームまで行つてから、電話で馬券を購入した。これで二安心だ。

新幹線に乗り込み、発車すると同時に眠りについた。時間を有効に使おうと何冊か本も持つてきていたが、眠くてならなかった。眠ると言つても熟睡はしていない。意識と無意識の境界面に浮かんたり沈んだりといった状態だ。なぜか頭の中では映画『パニラ・スカイ』の音楽が頻りに流れている。この前、ニューヨークに行つた時は確かケニー・G やシールだった。それにしても、昨夜、ケニー・G のライブに行つて、そこで買ったTシャツを今日は着ているのに、なぜケニー・G ではなくて『パニラ・スカイ』なのか。

ふと、馬券の事を思い出す。単勝と馬連を買つた。そこで気付く。当初の予定と違つたものを買つていた事に。危険な馬連ではなく、安全なワイドを買つつもりだったのだ。やはり駅のホームで慌てて買つたりしたのがいけなかった。のぞみのゆつたりした指定席で目を閉じつつ、脳味噌は『パニラ・スカイ』の音楽をBG Mにして馬券への後悔で満たされる。我ながら卑小な人間だ。

広島に着いてからの行動の予定から最近気になっている女の子の事まで、取り留めない思考の中を漂っている内に、のぞみは新大阪に着き、そこで自分はひかりに乗り換える。二時半頃、広島に着いた。

駅の案内表示には韓国語や中国語が併記されている。今の時代、地方でも国際化しているのだと感じる一方、未だに自動改札ではない事に首都圏との違いを見た。そう言えば、北の大都市、仙台も自動改札にはなっていないかった。しかし、駅のゴミ箱を漁る人がいるのは首都圏も地方も変わらないらしい。あまり楽しい事ではない。

外に出れば、雨だ。わざわざ、ゴールデンウィークにこんな遠くまで来たのに、これではホテルへのチェックイン前に市内を徘徊する気にはなれない。とにかく、まずは腹拵えだ。新幹線では眠り通して昼食を食べていない。大体、折角、旅行するのに、車内で弁当を食べても面白くない。そこで、自分は広島駅の駅ビルASSEの二階の飲食店を物色する。広島名物のお好み焼きの店が目に入ったが、無視した。多分、今夜、友人と食べる事になりそうだからだ。そして、何の変哲もないラーメン屋に入った。数日前、テレビのドラマで好きな俳優二人がチャーシューメンを食べる場面を見て、食べたい気分だったのだ。自分は旅行に来たからと言って、土地の名物を食べたり見たりする事には拘らない。車内の弁当を食べなかったのは、土地の名物を味わう為ではなく、

土地の人や匂いを味わう為だ。井の周囲をチャーシューがぐるり取り囲む一風変わったチャーシューメンを食べていると、前の席に三人連れの客が座った。年嵩の男性二人が小さな男の子を挟んだ位置だ。右側の男性が広島弁で店員に親しげに話しかけている。どうやら常連客らしい。会話の内容は、今日、市民球場に野球を見に行く予定だったのに雨で中止になってしまったとか、フラワーフェスティバルには昨日行ったとか、そんな他愛ない事だった。嬉しかった。空腹を我慢して広島ラーメン屋に入って良かった。これが旅行の楽しみだ。地元の人言葉、表情、生活に根差した他愛ない話題、それらが、その土地の空気を感じさせてくれる。

小さな満足を得てラーメン屋を出てから、友人にメールを送った。彼は仕事で会つのは夕方七時近くなりそうだ。その間、どうしたものやら。雨の中、外を徘徊する気にはなれないが、一度、チェックインしたら、友人から連絡が来るまで外に出る気にもなりそうにない。かと言って、ここから真つすぐホテルに向かうのもつまらない。結局、同じ駅ビル内のCD屋と本屋を徘徊し、物珍しくもないCDを一枚買ってしまった。

そして、する事もなく、無理に駅ビルを徘徊して時間を潰すのも馬鹿らしいので、ホテルへ向かう事に決める。街の風景も歩いている人も別に首都圏と変わらない。強いて言えば、若干、華やかさや洗練さに欠けるだろうか。それに人の数が少ない。地図も見ずに行き当たりばったりで漫然とホテルの方角に向かって歩い

て猿猴川にかかる駅前大橋を渡ると、向こう側に見慣れたマークが見えた。JRAのウインズだ。丁度、時間は、今朝、自分が東京駅で馬券を買ったレースの出走時間に近づいている。迷わず中へ入った。どこでも同じでは胡散臭げな男どもで一杯だ。我ながら何をしに広島まで来てるのやらと思いつつ、結果、自分が買った馬券が当たったので大満足。広島に来て良かったなどと全く馬鹿げた感想を抱きつつ、ホテルへ向かう。

路面電車が走っているのを除いて首都圏の都市と殆ど違いのない広島に物足りなさを覚えつつ、道端で老婆が座り込んで煙草をふかしているのに驚きながら、自分は今回、泊まるホテルの高層ビルが見える交差点まで来た。が、そこに横断歩道はなく、車道を渡れない。どうやら、地下道を通らしいと思いつ、地下道への入口を下りると、かなり広い地下街になっていて、やたらと人がいた。街中に人が少なかつたのは、単に雨だから皆、地下街をうつろっていただけのようだ。

広島を中心街に建ち、中・四国、九州随一の三十五階建て高層ビル、基町クレドにあるリーガロイヤルホテル広島が、二泊の宿だ。随一と言っても都心で高層ビルを見慣れているので、下から見上げてみても何の感動も生じない。それなりに内装は綺麗で、従業員も悪くないが、何かツメが甘い気がする。単なる高級ホテルで、個性に乏しい。ただ、窓からの眺めは流石に首都圏のホテルと違って、目の前を他の高層ビルに遮られる事なく、広島城や

広島美術館を見下ろし、彼方には山並みも見渡せる。何分、広島城はコンクリート造の復元で、しかも、ホテルの窓から見下ろしてしまふというのは、些か有り難味に欠ける気もするが、眺めがよい事に違いはない。

雨は止みそうにない。外に出る気はしない。持参した本を読む気力もない。自分はテレビをつけた。あちこち無気力にチャンネルを替えていると、CNNの人気番組『ラリー・キング・ライブ』のゲストにジョディ・フォスターが出演していた。思わず自分が見入ってしまう。意識して映画を観始めてから十年以上、自分が最も好きな女優は、ずっとジョディ・フォスターだった。二位以下は変動しても、一位は常にジョディ様だ。もう四十歳だと言うのに、何て綺麗で知的なんだろう、と感心しきり。結局、その流れてテレビ漬けになって、ジョディが終わった後もプリント・スピアーズのライブ映像を見たりしていた。我ながら広島まで来て何をしているのやら。

腹も空いてきた頃、漸く友人から連絡が入り、自分達は久し振りに再会して、彼の案内で八丁堀の広島風お好み焼き屋へ入った。そばがたっぷり入ったお好み焼きは美味いが、自分には少し量が多すぎるし、くどすぎる気がした。友人と飲みながらつまむより、腹を満たす為に食べる食い物だ。個人的には東京下町のもんじゃ焼きの方が性に合う。

とにかく、腹枵えを終えた自分と友人は、それから、久し振り

のビリヤード対戦を楽しんだ後、更に飲み屋に行く事にした。しかし、友人は酒が強くないので街の飲み屋を知らないと言つ。別に自分も拘りはないが、せっかく、広島まで来たのだから、白木屋だの養老乃瀧だのに入つてもつまらない。チェーン店でも、せめて関東では名前を聞かない所にしたいたいと思つてみると、或るビルの看板に「南部城下町」というチェーン店風の居酒屋の名を見つけた。そこにする事に決め、エレベーターに乗った。六階だ。六階に着き、エレベーターの扉が開いた。

真つ暗だ。連休中で休みなのか。扉から二人で顔を出して覗いてみる。啞然とした。店がない。何もないのだ。フロア丸ごと何もないのだ。コンクリートの床と柱だけ。

思わず二人で大笑い。工事中だったのだ。にも関わらず、表の看板の電気はついたまま、どこにも案内はなく、エレベーターは当然の如く普通に開いたのだ。これが笑わずにいられようか。自分は誰もいないフロアに向かって「ヤッホーッ！」と叫んでしまつた。

遠い都会の街中での予期せぬ笑劇に、すっかり気分を良くした自分と友人は、今度は工事中ではない居酒屋に行つて深夜二時近くまで飲み且つ語り合つたのだつた。

こつして、広島での、競馬とテレビと居酒屋三昧の一日が終わった。

¥ 広島徘徊 第二回

朝、七時に目が覚めた。目覚まし時計が鳴る前だ。寝たのは深夜二時なのに。睡眠時間五時間で自然と目覚めるといふのは便利だが、何やら年寄りみたいだし、休みの日の旅行の時にこれは少し損した気分だ。早起きは三文の得とも言つが。

シャワーを浴びた後、昨晚、頼んでおいたルームサービスが来たので、朝の広島城を見下ろしながら朝食を取る。しかし、オレンジューズはニューヨークの味に届かないし、馬鹿な自分は紅茶のポットの注ぎ方が分からずに試行錯誤の末に諦める始末。身分不相応に気取つてみても、やはり似合わないらしい。元々、ラフな格好しかしていないのでホテル内のレストランで食事をしたくなかつたというのがルームサービスを選んだ理由の一つなので、言わずもがなだ。

腹を満たして早速、出かける。今日は、昨日と違っていい天気だ。取り敢えずホテルからJR広島駅まで二キロ程度を歩く。広島街は、車道も歩道も幅が広く、違法駐輪も少ないので、徘徊には都合がいい。へらへら歩いていると、向こう側から来たカッブルらしき若い男女のうちの方が、自分に近寄つてきた。「すいません、原爆ドームって、こつちでいいんですか?」と訊かれ、自分は「はい、こつちですよ」と答えて、歩いてきた道の向こうを指差した。二人が去つてから、思つ。やっぱり自分は観光客に

見えないのか。昨日、広島に来たばかりで、原爆ドームの場所はホテルの近くだとは知っていても、まだ行ってないのに、その場所を他の観光客に教えている。どこに行っても自分は現地人と思われらしい。一体、何者なんだ、自分は？

今日、最初の目的地は宮島だ。以前から興味は持っていたところ、昨夜、友人に広島で観光地と言えばと訊いたら、宮島と答えたので行く事に決めた。広島駅から山陽本線に乗って宮島口駅まで。世界遺産に登録されている場所だけあって、車内は外国人も含む観光客で満員だ。宮島口駅から土産物屋や養老乃瀧が建つ道を少し歩いて、宮島口桟橋からフェリーに乗って宮島桟橋まで。

有名な大鳥居が見えてきた。今は干潮らしく、鳥居の足下が見えている。しかし、それより気になるのは海の汚さだ。同乗していた他の観光客も口にするくらい有り様で、緑色の水面に白いビニール袋が浮いていたりする。これでは風情も神格も感じられそうにない。フェリーを下りて、その気分は増すばかり。圧倒されるほどに建ち並ぶ土産物屋、ゴールデンウィークゆえの家族連れ観光客の多さ、すっかり単なる観光地と成り下がってしまったている。あちこちをうつろく鹿と、それを物珍しげに見て、矢鱈と触ったり餌をあげたりする観光客という光景は、奈良に似ていた。違うのは鹿の糞の臭いに、瀬戸内海の潮の臭いが混じっている事だろうか。

或る観光客が鹿を見ながら、「猿の方がたち悪いよね」と呟いた。

日光の猿の事だろうが、ふと自分は思った。頭の良い動物の方がたちが悪いとすれば、恐らく最もたちが悪いのは人間ではないのかと。

ただでさえ人嫌いな自分は、目の前の典型的観光地に辟易しつつ、境内を徘徊する。厳島神社は大鳥居も社殿も自分が持っていたイメージより小さい。自分としては大鳥居と言つと靖国神社のそれを思い出すのだから仕方ない。ここは大きさではなく、海の上にある事に貴重さがあるのだろうか。社殿側から大鳥居を挟んで広島方面を眺める。悪くない景色だが、無骨なホテルのビルが見えるのは戴けない。

とにかく人の多さから逃れたくて紅葉谷公園からロープウェイに乗って弥山へ。神社近辺に比べれば人は減つたものの、やはり多い。日本三景の一つとされる眺望も、「猿がいる！猿！」などぞと叫ぶ家族連れの騒々しさや、あちこちで撮っている写真で台無しといった感じた。それに天気が良いすぎる。以前、鳥取砂丘に行った時は、雨上がりで水平線が霞がかつていて幽玄な雰囲気だった。何となく物足りない気分のまま、山を下り、そそくさと広島に帰った。

昼時だったが、どこの店も観光客で一杯。広島市街に戻れば、フラワーフェスティバルで、やはり人が多い。うんざりしていた自分は昼食も食べずにホテルに向かう。少しでも早く一人になりたかった。漸くホテルに着く直前、道端で声をかけられた。中年

女性と外国人の少年の二人組だ。寄付をしてくれと言つ。いつも
の自分であれば、素気無く断るか、詳細に話を聞いてから対処す
るのだが、妙に疲れていた自分は相手が外国人のあどけない少年
だった事もあって、さして考えもせず財布を開けた。ところが、
小銭がない。あろう事か自分は千円札を差し出した。当然、感謝
されて、パンフレットを渡され、自分は少年の頭を撫でて歩き去
る。連れの女性が少年に「お礼は目を見て！」と注意していたの
が、耳に残つた。

すっかり人疲れした自分はホテルの部屋に着くなり、重たい靴
を脱いでベッドに倒れ込んだ。貰つたパンフレットに目を通して
みる。「日本からインドへ 愛の架け橋となる！」。ふむ、悪くな
い。インドには個人的に思い入れがあつた。「輝くクオリティライ
フのために」「特集：永遠に向かつて生きる 困難を生き抜く 天
国ってどんなところ?」。え? 天国? まさか……「ノアの箱
舟」。あ、もしかして……不安になつて中を開いてみる。「死
後の人生」「誰でも天国に行ける!」嗚呼……やつてしまつ
た。思い切り怪しげな宗教団体だった。気付かず千円もの大金を
渡してしまつた事に、物凄く後悔する。つくづく自分は、どうか
している。実に自分らしくない失敗だ。これは、十分に休養を取
つた方が良さそうだと思ひ、食事を取らずに暫く部屋でごろごろ
する事にした。読書や執筆といった能動的行為をする気力はなく、
テレビをつけ、既に一週間前に見ている音楽番組の広島での放送

やK1を、面白くもないのに何となく見て過ごす。我ながら広島
で何をしているのだろうと思つ。

少し疲れが抜けてくると空腹が気になりだし、洪々、立ち上が
つて市街に出た。せつかくだから、原爆ドームの方に行こうと決
める。ところが、昨日から広島市街はフラワーフェスティバルと
いうお祭で人だらけ。人類の負の遺産を象徴する原爆ドームの前
をカッブルが行き過ぎ、平和記念公園の周囲には屋台が並び、演
歌や民謡が鳴り響いている。原爆投下を想つどころではない賑や
かさだ。或る意味、平和だとも言えよう。またもや、人の多さと
騒がしさに辟易した自分は、平和記念公園で屋台の焼きそばを食
べる気にはならず、人の少ない場所を探し求めた結果、フェステ
イバルの会場から少し離れたマクドナルドに落ち着く。ファース
トフードだろうと何だろうと、客が少なければ、それでいい。そ
んな気分だった。おやつ時間にハンバーガーとチキンナゲット
を食べ、一息入れる。

このままホテルに帰つても勿体ないので街を徘徊し、広島パル
コの本屋に入った。そこで長時間を過ごす。外に出ても人が多い
し、ここの方が落ち着く。結局、自分の地元で買える本を五冊も
買い、パルコを出た。ホテルでテレビを見て、マックに本屋とは、
我ながら本当に広島で何をしているのだろうかと思つ。

ホテルに戻る直前、友人から電話が入った。今夜は一先ず、友
人の部屋にお邪魔する。他人の部屋を見るのは大好きだった。そ

の人の生活と性格が如実に見て取れるからだ。初めて訪問した友人の一人暮らしの部屋は、彼の実家時代の部屋よりも更に彼らしさが進行していて目を瞠るほどだった。正に足の踏み場もないとは、この事だ。部屋の中央にはお約束の万年床、その周囲を雑多に取り囲む無数の漫画とゲーム、散乱するコンビニ弁当の空き箱。見上げれば、白い壁には小さなカレンダーのみで、果ては部屋の隅に床置きされた電子レンジの上に無造作に脱ぎ捨てた靴下が乗っているではないか。呆れるよりも寧ろ感動する。ここまでいくと別の意味で、部屋に生活感はなかった。男二人で向かい合って万年床の上に座り、自分は嬉しさの余りニヤニヤしながら、友人の部屋を見回していた。我ながら変な趣味かもしれない。いつまでもそこにいても仕方ないので、外で夕食を取る事にして立ち上がった。ふと興味を持って、台所の冷蔵庫を開けさせてもらうと、電源が入ってない。ただの箱だ。どうせ使わないから、という事らしい。改めて感動する。

広島は都会にも関わらず意外に飲食店が少ない。友人はコンビニ弁当生活が多いらしく、自分達の店の探し方が悪いのかもしれないが、とにかく見つからず、阿呆みたいに繁華街を徘徊した挙句、居酒屋「魚民」に入った。朝はルームサービス、昼はマック、夜は魚民とは、広島旅行でも何でもない。

遅い夕食を終えて友人が自分をホテルまで送ってくれ、そろそろホテル近くの紙屋町交差点に近づいた時、あまり聞き慣れない

サイレン音がした。どうもパトカーらしいと思った瞬間、向こう側から何台ものバイクが轟音を立てて走って来た。暴走族だ。パトカーに追いかけられている暴走族だ。今時、珍しいと思いつつ、横を走り過ぎた改造バイクの彼らは何と全学連の如く御丁寧に顔にマスクまでしている。貴重なものを見た嬉しさで興奮した自分は走り去っていく暴走族の阿呆どもと御苦勞様なパトカーに向かつて「頑張れ〜！ ダッセ〜！」と思わず叫んでしまった。

昨夜の存在しない居酒屋「南部城下町」に今夜の暴走族と、貴重な体験を重ねて御機嫌な自分は、友人と別れ、一人、ホテルへと向かう。と、その時、思った。深夜の原爆ドームならば、雰囲気味わえるかもしれない。思い立って、ホテルを通り過ぎて原爆ドームに向かった。案の定、真夜中にライトアップされた原爆ドームは不気味さを醸し出している。元安川の向こうから、川とドームを眺めてみたくなって歩き出すと、不気味さも束の間、元安橋でストリート・ミュージシャンと呼ばれるド素人の下手な歌と演奏が聞こえた。橋を渡って平和記念公園から原爆ドームを望む。そこには独特の映像があつた。が、隣のベンチでは深夜にも関わらず一人の若い男が一心に携帯電話のメールに動しんでおり、ドームの近くでは自分と似た事を考えたらしい観光客二人組が写真を撮りまくっていた。結局、原爆の惨禍を肌身に感じる事は難しそうだった。夜空を見上げ、数ヶ月前に見上げたニューヨークの空を想った。世界貿易センタービル跡地も、五十年経てば、

ここ広島と同様に単なる観光地程度になってしまふのだろうか。何となく、やりきれない思いに浸りつつ、そう言う自分もまた、生活感丸出しで明日の朝食を買いにコンビニに寄り、モーニング娘。の特集をした雑誌を衝動買いしてホテルへ帰った。こうして、宮島と広島市街を徘徊した一日が終わった。

¥ 広島徘徊 第三日

朝、シャワーを浴びた後、昨夜、原爆ドームの帰りにコンビニで買ってきたパンとペットボトル入りの緑茶で朝食を取った。今日は徘徊するつもりはない。大事を取って早々に新幹線の乗車券を購入して、東京へ向かうつもりだ。

チェックアウト後、そそくさと広島駅まで歩き、新幹線の切符を取った。有難い事に指定席が取れたが、乗車時間は一時間以上も後だ。手持ち無沙汰になった自分は、広島まで来ておいて、喫茶店や公園で読書するのも勿体ないので、急遽、無作為抽出で本常に徘徊する事にする。

一先ず、駅前のフタバ図書で広島市の地図を買った。前回のニューヨークと同様、旅行最終日に記念に地図を買つという不思議な癖だ。ついでに芸能誌を捲って、上戸彩は可愛いなあ、と年甲斐もない事をした後、街へと繰り出す。

これまで行かなかった方向へ歩き出した。駅から南東、荒神町

の方だ。見事に見るべきものは何も無い。繁華街とは比べようもないくらいに寂しい感じだ。当然、観光客はいない。と言うよりか、地元の人も少ない。そこをただただ、てくてく歩く。傍から見たら何をしているのか分からない存在だ。実際、目的はない。目的なく歩く事が目的なのだから。何も無いな、ここも広島なんだな、普通の町と同じだな、などと思いつながら歩き続け、そして腕時計で時間を確認して駅へ引き返した。我ながら観光旅行らしくない行動だ。実は阿呆なだけかもしれない。

新幹線のホームに早めに上がった自分は、列車の到着を待つ間、文庫本を読む。大して面白くない本だ。大して面白くないが、事情があつて読む必要があるので、面白くないからこそ、早く読み終わらせたかった。文庫本を読んでいた。列車が来た。ん？ 列車が違つ。慌てて乗車券を確認する。げ！ 自分が乗るべき列車の発車時刻は、十分前だった。余裕を持ってホームに着いたのはいいが、どうやら本を読んでいる間に、自分の列車が到着して走り去るのに気付かなかつたらしい。致命的な展開に愕然として、来た新幹線に慌てて飛び乗った。列車が違つので、当然、指定席は座れない。連休最終日なので、当然、自由席は満席で座れない。わざわざ余計な金を払つて指定席を手に入れ、時間に余裕があつて市街を徘徊したり本を読んだりして、肝心の列車に乗れず立って帰る事になるとは。自分は本当の阿呆に違いない。

無性に腹が立つ。誰が悪い訳でもなく、自分が愚かっただけ

だから、尚更、腹が立つ。身悶えて何かに当たりたくなくなるほど、腹が立つ。しかし、他の乗客もいる込んだ車内なので、静かに歯噛みしながら、立っているしかない。余計に腹が立つ。ただでさえ、徘徊旅行は疲労を伴うので、明日からの仕事を考えて座って寝て帰れるようにと考えていたのに、これでは疲労が増すばかりだ。実に全く腹が立つ。このまま、むざむざと悶々としながら車内で立っているだけでは、癢に触る。こうなつたからには持参した読み始めたばかりの文庫本を読み終えてやると決め、まるで親の仇にでも対するかのような如き気迫で自分は文庫本を読み進めた。目の前に立っている浜崎あゆみ似の女の子を気にしつつ、懸命に文庫本を読み続けた。怒りの感情とは凄いものだ。結局、自分は一冊の決して薄くはない文庫本を数時間で読み終え、その頃、空いた席に座る事ができた。とは言え、もう東京駅はすぐだったが。

新幹線は東京駅に着いた。

元々、旧来の友人に会う事だけが目的で、広島に何の感慨もなかった今回の旅で、始終、感じた事は、生活感だった。人類史上、稀に見る惨劇の場となった原爆の地、広島は、ただの画一化された普通の日本の街だった。目に入るのは、セブンイレブン、スターバックス、マクドナルド、養老乃瀧、そこ、パルコ、魚民、つば八、東急ハンズ、ロッテリア、モスバーガー、ダイソー、無数の土産物屋。殆ど個性はない、ただのミニ東京だった。原爆は人々の生活感に呑み込まれていた。そう思うのは外から見ると

先入観に起因し、実際、そこに住む人がいる以上、四六時中、原爆の事を考えている訳にいかないのは当然だ。それ自体は決して非難されるべき事ではないのだろう。いずれ自分も今回の広島での出来事は頭から消え、食べて出して寝る生活に没頭するに違いない。そう分かつていても、何か複雑な気分だった。

今回、会いに行つた広島の人々が十年前に書いた詩を思い出す。あの頃、自分も彼も広島姿を見た訳でもなく、そこに書かれている事は別の事情に基づいていたのは明らかだが、それでも不思議と今の広島を見て、自分は彼の詩を思った。『現実』という題名の彼の詩を、以下に引用したい。

現実

現実が変わることなく続いてゆく／ある時は残酷なまでに／たとえ大地震で家族が家の下敷きになつても／ある時は淡々と／たとえ大事にしていたかわいいマグカップを落として割つてしまつても／ある時はありがたいことに／たとえ恋人が突然自殺しても／ある時は悲しくなるほど／たとえ悩み悶え苦しんでも／ある時は無為に／たとえA

I D S の宣告を受けても / そうやって
ぼくは / 死ぬまで生きてゆく / 永遠に

天央

こうして、広島の徘徊は終わった。